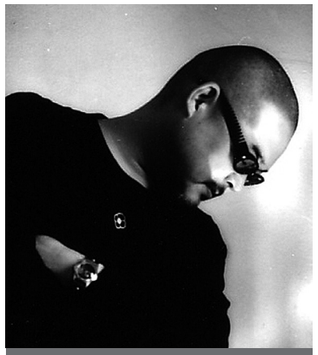
「普通」を突き詰め「特別」へ
人の心に触れるライティングデザイナー

COREDO室町、すみだ水族館、星のや竹富島など多くの照明デザインを手掛けてきた武石正宣氏。人に寄り添い、ラグジュアリーではない「普通」こそスペシャルな存在と語る氏のデザイン哲学を紐解く。



武石 正宣
Masanori TAKEISHI

ICE 都市環境照明研究所

http://www.ice-pick.jp/

二つの経験があり今の自分がいる

多摩美術大学建築科の卒業制作の際に光の魅力に気づき、照明に興味を持つようになり、卒業後は照明メーカーに就職しました。そこでは製造、流通、販売と一連の設備としての照明器具に携わっていました。そこで20代を過ごしました。気絶するくらい多忙で、終電で帰るのは当たり前のような毎日でした。その経験があったからこそ、建築、内装、インテリアなど空間を造る業界の流れや雰囲気などがつかめたと思っています。

それから30代で一念発起し、私の師匠にあたる海藤春樹さんの元を訪ねました。まさにここからが照明デザイナーとしてのスタートです。本当に広い見識と考え方を持っている方で、6年間お世話になり、ICE都市環境照明研究所を設立します。この二つの職場での経験が、今の私のやり方になっていると思います。

デザイナー業ひとつとっても様々な在り方があり、遠くの目標に向かって突き進む人や、目の前の階段を少しずつ上っていく人などと十人十色だと思っています。私は後者の方ですね。幸いにも階段には踊り場があります。その踊り場までたどり着くと、以前には見えなかった景色が見えてくるものです。

よく学生にも伝えているのですが、それぞれの道程でいわゆる「発酵」を繰り返し、人は成長していくものだと思います。私はもともと強い気持ちを持って照明デザイナーになったわけではありません。しかし当時の私には隣の芝生(デザイン業界)は真っ青に見えました。デザインという業界では、細かい違いはあるにせよ、基本的には目の前のことを確実にこなしていくことが大切だと、最近になって気づきました。この二つの職場での経験は、知識や知恵となって、今の私を助けてくれています。知識や経験があるからこそ、オリジナリティーは培われるのだと思っています。

照明デザイナーのあり方

私は1つのプロジェクトを完成させていくまでの行為を大人数でサッカーをやっているようなものだと考えています。

とりわけデザイナーは、基本的に自分一人では何もできない存在です。プロジェクトチームの一員としてかかわり、ゴールに向かって道程を構築していかなければなりません。ゴールまでうまくボールを運べなかった場合は、一度自陣に戻ったりして、全体の構想を構築し直したりします。その中で大切にしていることは、自分もプレーヤーとして立つということです。ただ言われた通りに動くだけではなく、オリジナリティーに富んだ動きを示していかなければ、おそらく次の試合には呼ばれないでしょう。そのためにここでしかない本物を求めて適宜、自分の引き出しを探りながら常にオリジナルを追求していきます。

そういう考えのもと、小さな案件でいえば、携帯電話の光り方から、建築物まであらゆる照明デザインに携わらせていただきました。プロダクトと建築とでは、照明が果たす役割は全く違うように思えますが、「人がどう見るか」という部分では同じで、照明とは常に、人に寄り添う存在だと思っています。

建築空間では、部屋が床壁天井で仕切られ、ある意味人の行動を規制しています。逆にいえば、人の行動をどう規制するかとも言えます。それはオフィスであったり、ホテルのロビーであったり、用途に合わせて制限していきます。レストランとファストフードのカウンター席でも全然違います。食事を取るという意味では同じですが、ファストフード店で長居されては困りますし、眠たくなるオフィスでは仕事になりません。そういう意味で、人の行動を目的に沿うように計算され空間は造られています。逆に捉えると、人は規制の中で生きているとも言えます。

そうした規制された空間に机と椅子があるとしたら、人は立っている視野と座ったときの視野が、その空間内に与えられた人の行動範囲となります。その上で、照明は視界の中に存在しているものです。それが私たちのフィールドだと思っています。

また、空間ではなく、人の視覚にアプローチするとなると、人間の目は精巧です。昼間、何万ルクスという明かりを浴びているにもかかわらず、物を見ることができます。一方、月明かりは2ルクス以下です。それでも自由に歩けるほど明るく感じます。これは、人間の目が自然と昼夜で切り替わっているからなせるものなのです。

故に本来ならば、環境照明も昼夜で変わらなければならないと思っています。光は人の生態に大きく寄与しています。高級レストランほど照明が暗い理由は、食事がメインではなく、料理を介して相手との関係性を高めていくことが目的だからです。基本的に人は照度が落ちると心地よい

■たけいし まさのぶ　プロフィール

略歴
1959　横浜出身
1982　多摩美術大学 建築科卒業
1990〜95　株式会社 海藤オフィス チ−フデザイナ−
1996　有限会社 ICE 都市環境照明研究所 設立

Instruction
2004〜　武蔵野美術大学 空間演出デザイン科 非常勤講師

Rewards
北米照明学会国際照明デザイン賞
2000　AWARD OF MERIT　国立科学博物館
　　AWARD OF MERIT　川崎市岡本太郎美術館
2003　AWARD OF MERIT　海ほたる
　　AWARD OF MERIT　BEAMS HOUSE 丸ビル店
2006　AWARD OF MERIT
　　daidai-ya 横浜クイーンズモール店
　　INTERNATIONAL　PARK HYATT SEOUL
　　AWARD OF MERIT　星野リゾート
　　プライベートコテージ
　　THE EDWIN F. GUTH MEMORIAL AWARD
　　club MINERVA
　　AWARD OF MERIT　中部国際空港 セントレア
2006　AWARD OF EXCELLENCE　club MINERVA
　　AWARD OF MERIT INTERNATIONAL
　　PARK HYATT SEOUL
2009　AWARD OF MERIT　AOビル
2011　DISTINCTION(最優秀賞)　八芳園 白鳳館
2013　AWARD OF MERIT　星のや竹富島
　　AWARD OF MERIT　すみだ水族館
2014　AWARD OF MERIT
　　W HOTEL 広州 Fei Ultra Lounge
2017　Special Citation Award　東急プラザ銀座
　　AWARD OF MERIT　星のや東京
　　AWARD OF MERIT　星のや富士　他

日経ニュ−オフィス賞
2004　経済産業大臣賞　中沢フーズ株式会社

Event
2009　個展 "LIGHT MATERIALS"

と感じるものなのです。

こう考えると、照明のあり方は利用者の目線で考えていくことが大切です。例えば、銀座での買物にはどれほどの照度がいいのか、湾岸の高層マンションであれば、どういう暮らしをしたいのだろうかなど、試行錯誤しながら照明デザインをしています。

その中で最も苦労したのは水族館です。相手はペンギンですから「快適な光とは？」と聞くこともできません。その他には星のや竹富島で星が見える明かりというお題がありました。よくあるホテルであればプール一面を明るくしてリゾート感を演出します。しかしここでは照明を2ヵ所しか入れていません。光のコントラストをつけ、ギリギリの明るさを狙いました。

これからの展望

「普通を貫きたい」

普通であることはつまらないというイメージを持ってしまいがちですが、私は普通というのがとても重要なことだと思っています。実は、普通をピカピカに磨くことが、「特別」を生み出すものだと思っているからです。つまり、「特別」なことは「普通」のことを突き抜けた先に存在していると思っています。

例えば、普通の蕎麦屋を考えたとき、夫婦で切り盛りをしていて、おいしい蕎麦を食べさせてくれて、二代目も受け継いでいたりする。そして夜は、ちょっとだけ飲むことができたりする。そういう誰もが思い描くような典型的な蕎麦屋が普通です。しかし、その普通の蕎麦屋はどこにあるのでしょうか。実はなかなか見つけることは難しいと思います。つまり私たちが「普通こうだよな」と考えていることは、あまり普通にないものなのです。実際に探し出すとなれば東京神田の老舗店まで行けばあるかもしれませんが、それはもはや特別な存在といえるでしょう。

このように普通のことが普通にできているのかと常に自分に言い聞かせています。照明デザインを依頼されたときも、当たり前のことを当たり前にこなし、何もおろそかにすることなく、しっかりとライティングの効果が発揮できるように意識しています。

そもそも建築業界の市場シェアでいえば、建築家がつくるシェアはたった2％だと言われています。3割が大手のハウスメーカーで、残りの7割が各地域の工務店です。工務店は大手ハウスメーカーの流行を取り入れ、大手ハウスメーカーは建築家が建てる建物の要素を取り入れていく。すると、たった2％しかない建築家が建てる建物は、もはや「概念」のような存在といえると思います。

さらに照明デザイナーの市場は多くて1％を切っていることでしょう。こうした概念じみたところに私たち照明デザイナーは生きています。すると、普通のことが普通にできないとなると、由々しき問題です。

照明の世界もいよいよＬＥＤが導入され、アナログからデジタルへの転換が始まりました。きっと、音楽業界がＬＰレコードからＣＤへ転換した変化のようにどんどん変わっていくはずです。一般的に電気をつけると言えば、明かりをともすという意味です。人間にとって一番必要とされていたものが、一番遅くデジタル化に突入しました。

おそらくまだまだ照明は進化し続けていくことでしょう。これからの急激な変化に翻弄されることなく、この1％という小さな市場の中で、自分なりの仕事を続けていきたいというのが私の思う現状維持ですね。

❶すみだ水族館
朝昼夕夜でシーン転換するペンギンプール

❷コレド室町1内部
木漏れ日をイメージしたインテリアデザインと光

❸コレド室町2外構
通りの四つ辻に「街の行灯」をともす

❹星のや竹富島
3灯×2ヵ所の水中照明で浮かび上がる屋外プール